成蹊大学日本文学科　日本探求特別講義B

2012年後期　**江戸の本づくり**

第４回　本ができるまで　職人の仕事

橋口（はしぐち）　侯之介（こうのすけ）

江戸時代の貨幣制度

江戸時代の貨幣は金貨、銀貨、銅貨の三種類が流通していた。そのため三貨制度などといい、複雑だったのだ。一国の中で円・ドル・ユーロがいっしょに流通していたのと同じである。そのために両替屋が繁盛した。

一両小判とその四分の一が一分（ぶ）、さらにその四分の一が一朱（しゅ）というように四進法なのが金貨。
銀はその重さがそのまま貨幣としての価値となり、一匁（もんめ）は 3.75 グラムである。その千倍は貫匁（かんめ）といい、十分の一匁を一分（ぶ）といった。分は金貨と紛らわしいが、こちらはふんともいったらしい。そのさらに十分一が厘（りん）といい、その下が毛（もう）である。銀貨は十進法。
銅貨はひとつ一文という個数が単位となり、銭ともいった。
「江戸の金遣（づか）い、大坂の銀遣い」という言葉があって、地域によって多く使われるのは、西日本では銀貨が、東日本では金貨・銅貨がよく流通していた。しかし、江戸でも銀貨は使われていた。売り手側の値段表示が銭なら銭で払い、金なら金で払うというのが習慣である。商品によって金建て、銀建ての別があって、茶や呉服などと並んで本は江戸でも銀建てだった。安い草双紙や錦絵などは文で表示されるが、ほとんどの本は匁で値段表示されることが多い。だから、銀の値段をよく知っておくことが必要である。

この三貨の間には、つねに相互にレートがあって、おおむね金一両＝銀 60 匁＝銭四千文というレートが関係にあった。時に一両＝65 匁とか 70 匁以上になるなど変動したが、どこの町にもあった**両替商**で、その時価相場で実際に交換された。大坂と江戸では異なる相場のときがあり、それを利用した商売というのもあったらしい。これを念頭に入れて、本の値段を調べることにする。

	金１両		銀１匁		銭 100 文	
金貨	1	両	0.0167	両		
銀貨	60	匁	1	匁	1.5	匁
銅貨	4000	文	66.67	文	100	文
現代換算 A	192,000	円	3,200	円	5000	円
現代換算 B	240,000	円	4,000	円	6000	円
現代換算 C	300,000	円	5,000	円	7500	円

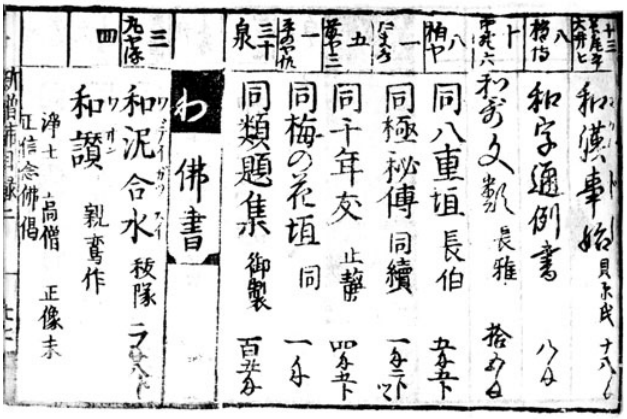
平均的な江戸時代における金銀銅貨の換算比率表

今のいくらか？

現代とは生活基盤が全く異なるので直接の比較はできないが、職人の日当でよく比べられる。江戸時代の後期、大坂では腕のよい大工の日当は銀４匁３分と定まっていた。ただし三回の食事を出したときは、一匁二分を差し引くという。江戸では定めはないが５匁から５匁５分である。
大工の一日当りの手間賃を現代、厚生労働省が調査した「屋外労働者職種別賃金調査」（同省ホームページ）によると平成 16 年は 13,830 円とある。これは、地域や職種全体の平均値なので、東京で「腕のよい大工」を想定して 16,000 円で計算してみる。そうすると１匁は 3,200 円前後である。そうすると一両が 192,000 円という換算になるのが上の表である。１匁が 4000 円なら、5000 円ならという比較も入れておいた。
ふつう金１両あったら、質素な家族なら数ヵ月生活できたといわれる。
参照：江戸末期の地方武士の家計簿を復元した磯田道史の『武士の家計簿』（平成 17 年、新潮新書）

本の値段

まず天和元年（1681）に京都の本屋が出した『新撰書籍目録大全』と、正徳五年（1715）に同じく京都の本屋・丸屋源兵衛が出した『増益書籍目録大全』には当時の売値が載っている。国学者・本居宣長が購入した本の値段入りのリストを残しており、この３つの資料から価格をサンプル調査した。



江戸時代の本は、おおむね数冊でセットになっている。三史料に出てきた本は、平均四・三から四・八冊構成となっていた。本の売価はこの冊数に比例しており、数冊で構成されている本は単純に、一冊あたりの単価に冊数を乗じた値段に近い。同じ本でも厚いもの薄い本いろいろだが、誠心堂書店に在庫している大本ないしは半紙本で調査したところ、一冊あたりの目次や序文などを加えた総丁数の平均は約五十丁だった。その前後を目安に考えて、平均冊数で一点あたりの価格を割ると、一冊の値段はがわかる。それによると 1.7 から 1.8 匁となるが平均的なところである。現代感覚で五千七、八百円である。

	1 点あたりの価格（匁）	1 匁=3200 円として 1 点当り価格（円）	1 点あたりの構成冊数	1 冊あたりの価格（匁）	1 匁=3200 円として1冊当り価格（円）
A 天和板『書籍目録』	7.51	24,032	4.34	1.73	5,537
B 正徳本『書籍目録』	8.77	28,064	4.85	1.81	5,792
C 本居宣長購求書籍	8.5	27,200	4.67	1.82	5,824

書　名	冊数	墨付丁数	単価 匁	計 匁
都名所手引案内	1 冊	56	5	280
謝茂秦（山人）詩集	3 冊	108	4.63	500
孝謙天皇?	1 冊	31	4	106.64
浜まさご　再板	7 冊	245	7.7	1900.28
怡顔斎蘭品	2 冊	57	7.25	378.6
千金方薬注	4 冊		5	
1 丁当り平均			5.72	

大衆本は安い

草双紙のたぐいは安かった。黄表紙などは一冊 6 文だった。１両が銀 60 匁だったとき、銀一匁 3200 円とすると銅貨の一文はおよそ 50 円ということになるので、一冊 300 円ほどだ。

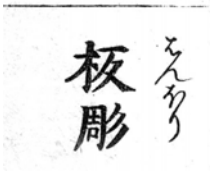
瓦版と俗にいう「よみうり」は一枚もの 4 文（200 百円）、錦絵も色数の多い上等なもので 32 文（1600 円）、安いものでは 16 文（800 百円）から売っていたという。当時二八そばといわれていたかけそばが 16 文だった物価事情から考えると案外安いことがわかる。この安さが日本における書物の大衆化を呼んだのである。多いと一万部も刷ったという大量生産だったことも価格を抑える要因になった。

原価の秘密にせまる

実際の本づくりの工程から、本の製作費の明細を追ってみる。原稿が届いた所から始まり、本屋はそれぞれの工程の専門的な職人に仕事を依頼する。

板下を書く

木版に彫るさいに、元になる文字を板下という。作者からの原稿を専門の書き手＝筆耕に頼む。それが丁寧に清書する。次の彫り師はそれを板木面に裏返しにして貼りこみ、それにしたがって正確に彫っていく。



板木を彫る

版本をつくる工程でもっとも面倒なのは板木に彫ることである。そのための職人は、は彫り師と呼ばれたが、板彫、板木師とか板木屋などともいった。上の表はある本屋の記録にあった費用である。一枚彫るのに、5 から 7 匁かかる。職人 1 日から 1 日半

分の手間賃である。
板は日本では山桜が一番多いが、黄楊(つげ)は材質が堅く木目が細かいので細密な絵などに用いた。この材料は彫り師が用意した。彫りあがったら、薄い墨で試し刷りをする。それで作者や本屋側が校正をする。
間違えたら大変である。しかし、現存する板木を見ると、失敗の跡はほとんどみられない。万一、間違えたり、作者のミスが後で見つかったときなどは、訂正する箇所だけ板をくりぬいて、正しい字形を彫った木片を埋め込む。これを象嵌(ぞうがん)とか、埋め木(うき)とか入れ木(いき)ともいう。彫り師のミスなら仕方ないが、作者や本屋の側のミスは有料で直す。

紙の調達

実は出版費用で大きな比重を占めるのは紙代である。下の表にあるように4割くらいを占める。だから、余計な部数は刷らない。単純に刷り部数に比例する。本屋は普段から紙問屋と親しくしておいて、安く入手する努力をする。

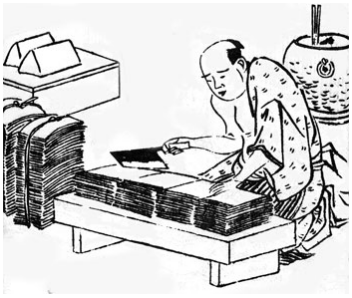
刷り師

板木が完成し、紙が届くと刷りにかかる。板摺(はんず)りともいった。多いと4，5名呼ぶこともある。板木を置いて墨を塗り、その上に紙を置く。そこをバレンと呼ばれる刷り道具でこする。次から次に刷りあがった紙は、頁の順番（丁合(ちょうあい)という）に重ねておく。本屋の史料によれば、この手間賃を十枚につき二厘五毛としている。一匁を3200円とすると、80円である。図は『**的中地本問屋**(あたりやしたじほんどいや)』の中に出てくる刷り師。

製本＝仕立屋

あるいは表紙屋ともいう。現代の製本屋である。まず刷りあがった本文を一部ずつ順に並べて、それを束ねていく（下図の右側の職人)。それを下綴じとして紙縒(こよ)りでしっかり綴じる。

そのあと、大きな包丁で紙の周囲を截って、きれいにそろえる（右図)。
最後に表紙をつけて、外側を糸と綴じすればできあがり。
本屋に納品して、これに外袋をかぶせて店に並べる。



刷りから製本まで払う手間賃（仕立料）は、本全体のコストの2，3割である。**紙代と仕立料は発行する部数によって変動するが(流動費)、板木製作までにかかる費用(板賃)は、部数に関係なく経費としてかかる(固定費)。**

書　名	板賃	板賃割合	紙代	紙割合	仕立料	仕立割合	計
六如庵詩鈔　初編3冊	2.8	38.36%	3.13	42.88%	1.37	18.77%	7.3
六如庵詩鈔　二編3冊	2.8	37.33%	3.37	44.93%	1.33	17.73%	7.5
智襄3冊	1.6	27.59%	2.8	48.28%	1.4	24.14%	5.8
絵本亀山話　１０冊	2.4	25.53%	3.66	38.94%	3.34	35.53%	9.4
合計	9.6	32.00%	12.96	43.20%	7.44	24.80%	30

講義の要旨はpdfにするので、http://www.book-seishindo.jp/seikei_tanq/でダウンロードを。